

局部長



「個の力」を  
結集させて  
税務行政をデザインする

高松国税局 調査査察部 部長 **松香 圭美** 平成13年入庁

現場(調査・査察)の努力

高松国税局の調査査察部は、四国4県に所在する大企業の調査と悪質な脱税者の刑事告発を担当しており、納税者に適正な申告・納税をしてもらうため、調査官や査察官が強い正義感・使命感を持って日々奮闘しています。大部分の企業や人は適正な申告をしていますが、そうではない納税者も一部いるのが現実です。手口も多様化しており一筋縄ではいきませんが、知力を結集させ、特に、節税スキームを利用している企業や、かなり収入があるのに全く申告しない者など悪質なケースを見つけ出し、相応のパナルティを課すことによって、牽制効果を生み出しつつ、課税の公平性を担保するよう努めています。

現場が回らなければ税務行政は成り立ちません。現場の管理職としては、職員一人一人が最大限の能力を発揮できるよう、状況や課題を的確に把握した上で臨機応変に判断し、対応することが大切と考えています。



一步先の税務行政へ

入庁して約20年、国税組織内外で様々な業務を経験してきました。1~2年毎に異なる部署で新しい仕事に携わるため、周囲のサポートを得ながら、自分が貢献できることを考え実行するよう努めています。多様な業務や人との出会いを通じて、自らを成長させる機会がたくさんありました。

税は様々な世の中の動きや物事に関係するため、国税組織で携わる業務や必要な知見の幅は広く、挑戦の連続です。また、世の中の流れに対応するため、税務行政も変化し続ける必要があり、終わりはありません。日々の業務における一人一人の努力が積み重なった結果やその過程を尊重しつつ、経済・社会の状況などを踏まえて改善点や新たに取り組むべき事項を見出し、組織全体を更なる高みに導いていくことが求められます。

「個の力」を結集させて、実際に機能する税務行政をデザインする。税という切り口で様々な業務に携わってバランス感覚を養いつつ活躍の幅を広げ、多様なフィールドで培った経験を元に組織に貢献する。責任は伴いますが、魅力的な職場だと思います。

局部長



怒りと葛藤。実力と信頼。  
スマートじゃなくても、  
この仕事が好きです

広島国税局 徴収部 部長 **竹内 啓** 平成12年入庁

絶対に逃げ切ってる!

「徴収に来ました」って、集金の時に使う言葉。しかし、税金の世界で「徴収」とは、滞納者から税金を納付してもらう時の言葉です。

時々「〇億円の追徴課税がされた」なんて報道ありますよね。あれは課税。課税されても「絶対に逃げ切る」と吹聴して回る大人、いるんですよ。

課税逃れは取引を偽装しますが、徴収逃れは財産を隠匿します。「課税逃れをしたのは認める。でも金がないから、払わんよ」というわけ。

国税局徴収部は、財産を探し出し、必要なら差押え、換価(現金化)します。要すれば、令状なしに自宅や事務所の捜索(ガサ入れ)もできます。警察官よりも強力な権限と言われることもあります。

悪者だけじゃないから、悩む

「でも、財産隠しの手法も高度になってるんじゃない?大丈夫なの?」なんて思った人いる?

詳しくは国税庁の説明会で!と言いたいけど、少しだけ。強い権限、訴訟や国際共助などの法的手段、あるいはデータを駆使した資産把握といった手法には確かに限界があります。現場では、徴収官が畏怖されるような人間か、信頼関係を築けるかといった点も大切なのです。

実は徴収の悩みはもう一つ。それは「悪者だけじゃない」ということ。「以前は羽振りが良かったが、金を使い果たし、今は古いアパートで一人暮らし。体を悪くして事業は細々と」なんてことだってあります。

滞納者の実情を把握して、真摯に向き合い、滞納を終わらせる方策と一緒に考えることも徴収の仕事なのです。

社会を支えるのは信頼。  
それを支えるのは...

「やっぱり最後は人間力か」「心が通じ合えば」と単純に考えるほど皆さんはナイーブじゃないですよ。私も、国税庁の仕事をやってきて、ズルを考える人が増えたら、たちまち社会は成り立たなくなると実感しています。大切なのは、悪質な滞納者に畏怖される実力を磨きつつ、人として真摯に向き合う度量を培うこと。

そんな組織でリーダーを目指す生き方、悪くないかもしれませんよ?

